

氏名	李 芋
学位	博士（日本語文化学）
学位記番号	
学位授与年月日	
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	『和名類聚抄』と『医心方』—その引用書目の比較を中心に—
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授 蔵中 しのぶ (副査) 大東文化大学教授 寺村 政男 (副査) 大東文化大学教授 管 寧 (副査) 広東外語外貿大学教授 韋 立新

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

1. 論文の要旨およびその特色

本論文の研究対象は、『和名類聚抄』（以下『和名抄』と略称）と『医心方』である。

『和名抄』は日本最初の分類体の漢和辞書、承平年間（九三一～九三八）に醍醐天皇皇女勤子内親王の命によって、源順が撰進した。漢語を部門別に類聚・掲出し、音義を漢文で注し、万葉仮名で和訓を加え、掲出語について漢籍・和書を博搜して考証・注釈を加える。『和名抄』には十卷本系と廿卷本系の二系統の写本が存在し、十卷本系は掲出語を二四部一二八門に、廿卷本系は三二部二四九門に分類する。

一方、『医心方』は日本の現存最古の医学書、鍼博士・丹波康頼の撰になる。円融天皇の天元五年（九八二）に撰述を終え、浄書のうえ、永観二年（九八四）奏進におよんだとされる(1)。全三十巻は、隋唐の医書百余点を引用して、各種疾患の病理・治療を述べ、さらに、本草・明堂・孔穴・養性・服石・食餌などに及ぶ。

『和名抄』と『医心方』の成立年代の差は五十年、撰者・源順（九一一～九八三）と丹波康頼（九一二～九九五）の年齢差はわずか一歳である。平安中期、明経の学を学んだ源順撰『和名抄』、医学を学んだ丹波康頼撰『医心方』が、それぞれに同じ書目を引用している事実に注目し、平安中期の律令官人の学問の質を問うための一助として『和名抄』『医心方』に共通する引用書目の本文を調査した。

『和名抄』『医心方』はともに、先行する文献から必要な項目・文章を抽出・類聚・編纂して成った類聚編纂書である。『和名抄』の引用書目は三百数十種、『医心方』の引用書目は二八一種にのぼる。しかも、両書の引用書目には、共通するものが三十四種確認される。

狩谷椽斎『箋注和名類聚抄』以後、『医心方』における唐代の医学類書『千金方』『外台秘要方』の引用状況があきらかにされ、『黄帝内経明堂経』復原本文が作成された。本論文は、その成果を取り入れ、『和名抄』と『医心方』に共通する引用書目「病源論」「黄帝内経」「針灸経」「太素経」について『和名抄』『医心方』引用書目の本文との出典考証をおこない、『和名抄』『医心方』の本文および引用手法について考察を加えたものである。

2. 論文の審査内容および評価

本論文は次の六章および附録から成る。

- 第一章 『和名類聚抄』と『医心方』
- 第二章 『和名類聚抄』引用書目「病源論」攷
- 第三章 『和名類聚抄』引用書目「黄帝内経」攷
- 第四章 『和名類聚抄』引用書目「針灸経」攷
- 第五章 『和名類聚抄』引用書目「太素経」攷
- 終 章
- 附 録

「第一章 『和名抄』と『医心方』」では、研究対象の研究史および伝本の状況を論じた。

「第二章 『和名類聚抄』『医心方』引用書目「病源論」攷」では、『医心方』に最も多く引用される書目「病源論」をとりあげた。「病源論」は隋・巢元方等奉勅撰『諸病源候論』、その引用例は五五五例におよび、『医心方』編纂のベースとされた医書である。一方、『和名抄』にも「病源論」の引用が二七例確認される。このうち、『和名抄』が『諸病源候論』を引用する七例について検討した。

第一に、『医心方』は『諸病源候論』から「脈論」を一切引用しない。『医心方』に先立ち、医書で

はない『和名抄』もまた、「脈論」を一切引用しない。このことは、平安中期における中国医書の受容に際して、「脈論」に説く脈による診断法や理論に関心が持たれていなかったことを示唆するとした。

第二に、専門的な医書である『医心方』は、『諸病源候論』から「脈論」を除くほぼ全文から、原典の文章に手を加えず、長文をそのまま引用する。これに対して、分類体漢和辞書である『和名抄』は、和訓の掲出に最小限必要な語彙・語義のみを引用することを論じた。

第三に、『和名抄』が、『医心方』と同じ『諸病源候論』本文を引用する七例のうち、六例は『諸病源候論』の各項目の冒頭部を引用することを指摘した。

第四に、唯一例として㉔「虬虫」のみは、引用が『諸病源候論』の冒頭部ではないことを指摘した。

第五に、『諸病源候論』『医心方』の本文とは異なる『和名抄』の独自異文三例を指摘した。

これら第三、第四、第五の例は、源順の『和名抄』編纂上の工夫を反映した本文の改変と考えた。第五の例に限って言えば、『諸病源候論』に現存諸本とは別系統の本文が存在し、『和名抄』がこれを引用した可能性は低いことを論じた。

第一の点、なぜ、『和名抄』『医心方』に「脈論」が引用されないのかという問題については「終章」で「医疾令」をあげて論じている。論文の構成上、第一章に配するのが適切ではないか。

第二、第三、第四、第五の『和名抄』の引用手法は、第三章第一でもくりかえされる論理で、『和名抄』の漢和辞書という性格からして、当然と言えば当然の結論である。が、「あたりまえ」とされることを、精細に調査考証した努力は評価されてよいであろう。

「第三章 『和名類聚抄』引用書目「黄帝内经攷」では、『和名抄』の「黄帝内经」引用例三例をとりあげた。狩谷掖斎は『和名抄』所引「黄帝内经」が唐・楊上善撰の佚書『黄帝内经明堂類成』と推定しつつも、本文が伝存せず考証不能のため、『鍼灸甲乙経』との類似を指摘するにとどまった。掖斎以後の研究成果を取り入れ、本文の比較をおこなったところ、第一に、『医心方』が『黄帝内经明堂経』本文に手を加えず、ほぼ全文を引用するのに対して、『和名抄』は和名掲出に最小限必要な語彙・語義のみを引用することが確認された。

第二に、『医心方』半井本に二ヶ所、『和名抄』諸本と同じ文字の誤りが見いだされた。このことは、平安中期に日本に伝わった『黄帝内经明堂経』の本文に誤写があったことを示唆するとした。

第二の点は、日本撰述の『和名抄』『医心方』の引用本文によって興味深い結論をえた。とはいえ、『黄帝内经』の伝本・本文状況は非常に錯綜しており、より精細な調査の余地が残されている。

「第四章 『和名類聚抄』引用書目「針灸経」攷」では、『和名抄』の「針灸経」引用例八例をとりあげた。狩谷掖斎は『和名抄』所引「針灸経」本文が伝存せず考証不能のため、『黄帝内经明堂経』『鍼灸甲乙経』との類似を指摘するにとどまった。掖斎以降の研究成果を生かして、本文の比較をおこなったところ、第一に、『和名抄』所引「針灸経」八例中二例は、唐代医書と本文が類似し、「針灸経」が『黄帝内经明堂経』に依拠することが確認された。

第二に、八例中三例には、唐代医書とは異なる本文が確認された。これは「針灸経」の「注」の本文である可能性が高く、日本で和訓を付した「針灸経」の注が流布していたことを示すと考えた。

第三に、八例中三例は、現存する唐代医書にない『和名抄』『医心方』の独自異文である。これは、中国では失われた『黄帝内经明堂经』『小品方』本文であり、佚文が日本に伝存することを指摘した。

第一の「針灸経」が『黄帝内经明堂经』に出典をもつ可能性、第二の「針灸経注」存在の可能性は興味深い。「医疾令」に規定された医学書の享受の問題であり、日本で「針灸経」の注釈研究・講説の証拠となる。第三の異文は事例が多く、調査を深める必要がある。佚文と断定するには慎重を要する。

「第五章 『和名類聚抄』引用書目「太素経」攷」では、『和名抄』の「太素経」、唐・楊上善撰『黄帝内经太素』の引用例二例をとりあげた。

第一に、二例とも『黄帝内经太素』巻五冒頭部から採録され、うち一例は『和名抄』『医心方』は反切の表記までが『黄帝内经太素』に一致することを指摘した。反切の引用は、古辞書にあっては、さほ特異なことではない。『医心方』が反切を引用する用例とその意義についても論じられたい。

第二に、『黄帝内经太素』が欠損する一葉に含まれる一例には、『黄帝内经霊枢』に楊上善の注とみなしうる本文が見いだされた。これは第四章第三の異文処理の問題と連関する。

「終章」では、『医心方』引用書目の引用頻度を一覧して示し、『和名抄』『医心方』に「脈論」が引用されない理由として、奈良時代の医針生の必修テキストとして「医疾令」に規定された『脈訣』が、平安時代以降、見られなくなることを指摘し、脈による診断法・治療法が、平安中期には重視されなくなったことの反映と考えた点は興味深い。なお、考証の余地がある。

総じて、成立年代の近い『和名抄』と『医心方』の比較に着目し、歴大な典籍とその伝本を調査収集し、一字一句にいたる手堅い出典考証によって、客観的な出典関係・書承関係を解明し得た点は高く評価される。わずか三年の留学期間に、日本の考証学の方法を習得し、独自の見解を提示しえた努力は、認められて良い。『医心方』の基礎的研究と位置づけられるが、発展性のある有意義な研究テーマであり、今後、実証性に磨きをかけて、『医心方』の出典研究を発展させていくことが大いに期待される。

3. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上